HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アレクサンドル1世期のロシア正教教育改革とプラトン
Author(s)	兎内, 勇津流
Citation	プラトンとロシア = Plato and Russia / 根村亮編 ; 3 (「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 = Occasional papers on making a discipline of Slavic Eurasian studies ; No. 25), pp. 1-16
Issue Date	2008-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33877
Type	report
Note	21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」
File Information	tonai.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アレクサンドル 1 世期のロシア正教
教育改革とプラトン

兎内　勇津流

はじめに

アレクサンドル 1 世期（在位 1801-1825 年）は、ロシア正教の歴史において、はじめて宗教教育制度の体系化がはかられた時代と言える。

正教会の教育機関としては、1632 年にはすでにキエフにペトロ・モヒラ学院が設立され、その後、ピョートル 1 世期（在位 1682-1725 年）の 1687 年には、モスクワにスラヴ・ギリシャ・ラテン学院が設けられた。これらは、当時のロシアにおける正教教育の基幹的教育機関となり、その後それぞれキエフ神学アカデミー（1819 年）、およびモスクワ神学アカデミー（1814 年）に改組されるが、その位置づけや教育内容は必ずしも制度化されておらず、一定したものでなかった。すなわち、神学アカデミーは、中等教育機関としての神学校（セミナリア）の卒業生を受け入れて、最高レベルの神学教育と研究を行うというシステムは、アレクサンドル 1 世期の 1808 年から 1814 年にかけて実施された正教教育制度改革によってはじめて成立したのであって、それまでは、どの学校がどの教科のどれだけの水準のことを何年かけて教えるか、一定しなかったのである[1]。また、教育の目的も、聖職者の養成に限られておらず、神学の授業のない神学校も存在したという[2]。

18 世紀のロシアにおいて、正教会の学校が教育機関として注目されるのは、他の教育機関があまりに貧弱だったことによるところが大きい。

18 世紀以前のロシアにおいては、教会文化と世俗文化とが分離されておらず、教会の外に教育機関は存在しなかったように思われる。

ピョートル 1 世期には、西欧文化が積極的に摂取され、文化の領域は教会の独占物であることをやめて、はじめて各種の世俗的学校が設置されるようになったが、個別的職業教

---

[1] たとえば、Alexander Sydorenko, *The Kievan Academy in the Seventeenth Century*, University of Ottawa Ukrainian Studies, no. 1 (Ottawa: University of Ottawa Press, 1977). を参照。なお、海老原遙は 18 世紀ロシアの正教会の学校について、「それらは小学校、セミナリア、アカデミアという擬似的な学校階梯をも構成したが、これらのそれぞれは初等、中等、高等の教育機関と目し得よう。」『帝政ロシア教育政策史研究』風間書房、1997 年、123 頁 と述べるが、賛成できない。

[2] *Титлинов Б.В.* Духовная школа в России в XIX столетии. 2 т. Т. 1. (Westmead, UK: Gregg International Publishers, 1970, Reprint. Originally published in 1908), С. 9.

育の色彩が強く[3]、普通教育を基盤にした教育制度がある程度体系的に整備されるのは、同じくアレクサンドル 1 世期の 1803 年を待たなくてはならなかった。

ロシア正教の教育改革は、上の公教育改革に引き続いて、内容的に多くの相似点を含みつつ、しかし制度的には別個のものとして行われた。すなわち、正教会の教育システムはロシアの公教育の制度とは別個のシステムとして、文部省の管轄ではなく、宗務院に附属する宗教学校小委員会[4]の管轄下に置かれたのである。

本稿において注目したいのは、この教育改革にあたって定められたその宗教学校学則（1814 年）[5] において、その哲学科目の内容として、特にプラトンの名が挙げられていることである。

なぜここでプラトンの名が挙げられることになったのか。当時のロシアにおける正教教育にとって、プラトンとはどのような存在だったのか、本稿ではそのことについて考えてみたい。

1．18 世紀におけるロシア正教教育と正教神学

ここでは、とりあえず前史として、18 世紀におけるロシア正教教育および正教神学がどのようなものであったかについて、ごく概略を述べることとしたい。

そもそもキリスト教の受容以後長きにわたって、ロシア正教会には、修行の場である修道院はあっても、学校は設けられなかったと思われる。しかしこれは、ロシア正教会が他のキリスト教宗派に対して特殊ということではないだろう。カトリック教会においても、ギリシャ正教会においても、当初から学校を設置したという話を聞かない。

これが大きく変化したのは、西欧において印刷術が発明され普及して以後のことである[6]。

同一性が保証されたテキストが容易に入手可能となったこの時代、人文主義の潮流下で、キリスト教関係文献や古典古代哲学者の著作が出版され、文献学的研究が進み、ルターやカルヴァンによって宗教改革が行われ、カトリック教会の側もこれに対抗するという状況になった。これがおおむね 16 世紀までの西欧に生じた状況である。

この時代には、聖書をはじめとする関係文書を文献学的に検討し、学問的にキリスト教の教義を基礎づけ、これを知識として教えることが可能になり、かつ必要になったのである。

---

[3] たとえば、砲兵学校、数学航海術学校、航海アカデミーなどが設置された。佐々木弘明『帝政ロシア教育史研究』亜紀書房、1995 年、48-54 頁、60-62 頁。

[4] 宗教教育小委員会 Комиссия духовных училищ は、1807 年に組織された宗教教育改善委員会 Комитет о усовершений духовных училищ が 1808 年にその答申を提出した後、この委員会を改組して設置された。なお、その後小委員会は 1839 年に廃止され、業務は宗務院に新設された宗教教育局 Духовно-учебное управление に移管されたが、正教の教育機関が文部省と独立して運営される点は変わらなかった。*Кондаков Ю.Е.* Государство и православная церковь в России: эволюция отношений в первой половине XIX века. СПб.: Изд-во «Российская национальная библиотека», 2003. С. 333.

[5] «Высочайше утвержденный проект Устава духовной академий». Полное собрание законов Российской империи.（以下 ПСЗ と略記する）Т. 32. С. 910-954. № 25б673 (Август 30 1814).

[6] グーテンベルクによる活版印刷術の発明は 15 世期中頃のことであるが、数十年のうちに西欧各地に広まった。

出版が産業として展開されることにより、聖書をはじめとする主要な文献が普及し、信頼できかつ読みやすいテキストが、それまでとは比べものにならないほど多数の人々の手に渡るようになったことは、信仰の内面化を促したと同時に、教会の中だけでなく、教会の外においてもキリスト教の教義が批判的に検討される道を開いた。

ロシアは、基本的にこうした潮流の外にあった。

その理由は、文字と言語の違い（キリル文字と教会スラヴ語の世界だったロシアの住人にとっては、ラテン語やギリシャ語の壁は高かった）、教育機関の未整備（大学をはじめとして学校のたぐいが存在しない）などに求められるが、とはいいつつも、ロシア正教会の側においても、それと全く無関係に存在し続けることはできず、そうした知的状況の変化への対応が必要となった。ここで詳しくは述べないが、ペトロ・モヒラ（1596-1647 年）がキエフに学校を開いたのも、モスクワにスラヴ・ギリシャ・ラテン学院が設けられたのも、そうした状況を反映してのことと考えられる[7]。

しかしながら、ロシア正教会は、そこで教授すべき神学研究の独自の伝統を有していたわけではなかった。よしんばあったにせよ、それは、西欧流の文献学を土台にした聖書研究に対抗できるものではなかった。また、その仕事は、著作として定着され、あるいは教育機関で系統的に伝授されるものではなかった。ギリシャ正教会の一端を担う存在であったロシア正教会においては、ギリシャ語原典による独自の文献学的研究あるいは哲学研究の蓄積はなかったといってよいのである[8]。

ピョートル 1 世期の 1687 年に、モスクワにおいてスラヴ・ギリシャ・ラテン学校が開設され、18 世紀を通じて正教会の中軸的な教育機関であったことは、先に述べた。

この学校の開設に際しては、2 人のギリシャ人教師が招請されたことが知られている。イオアンニキー（1633-1717 年）とソフロニー（1652-1730 年）のリフード兄弟である[9]。

---

[7] 16 世紀はじめにマクシム・グレク（1470?-1556 年）を教会文献の翻訳のためアトス山からモスクワに招いたのも、ニコン総主教（在位 1652-1666 年）が、典礼文書校訂の資料収集のため、1653 年にアルセーニー・スハーノフ（?-1668 年）をアトス山に派遣したのも、このような状況への対応の一環として理解されるであろう。すなわち、かつては写本に誤りがあったり、使用する本によってテキストに差があるのは当然のこととして理解されており、敢えて最終的なテキストを確定させることは必要とされなかったのである。しかし、印刷術が普及した時代において、確定した権威あるテキストを持たないことは、教会の弱点とされるであろう。

[8] 当時のロシア正教会内でギリシャ語を解する者はごく少数、もしくは皆無だったと思われる。ボリス・フォンキッチによれば、ロシア正教会に伝わるギリシャ語写本のうち 16 世紀以前に溯るものはかなり少数とのことである。*Фонкич Б.Л.* Греческие рукописи и документы в России в XIV - начале XVIII вв. М.: Индрик, 2003. (Россия и христианский Восток. Библиотека. Вып. 4). С. 115-116. なお、こうした問題については、はなはだ不十分ながら、拙稿「16-17 世紀ロシア人の書籍観についての覚書」『近世ロシアにおける法文典の史料学的ならびに文献学的研究』（平成 16 年度-18 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書）北海道大学、2007 年、261-268 頁 において触れたことがある。

[9] 彼らはともにパドヴァ大学を卒業し、イオニア諸島中のケファリニア島にあるギリシャ人学校とマケドニアのスラヴ人学校で教えていた。*The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*, vol. 20 (Gulf Breeze, FL: Academic International Press, 1981), p. 44.

彼らが選ばれたのには、ギリシャ正教の伝統を伝えるのに適材であり、正教会間の関係、特にコンスタンチノープル総主教座との関係上も好都合かつ、西欧の学問にも通じていて、それを踏まえた上での仕事ができる、という判断があったと思われる。

彼らは 1685 年にモスクワに到着し、草創まもない学校の教壇に立ち、ギリシャ語で授業したと伝えられるが、この方向は長続きしなかった。

兄弟のあとを受け継いだのは、主として、キエフ・モヒラ学院の卒業生をはじめとするウクライナの出身者であったが、彼らは、主にラテン語で授業し、それがこの学校の伝統として長く続いたのである[10]。教材として用いられたのは、主としてプロテスタント系あるはカトリック系の学者の仕事であって、主にラテン語で書かれていた。

ロシア正教会としては、その教義がローマ・カトリック教会と同じであっても、プロテスタント教会と同じであっても、その独自性を傷つけることになる。また、カトリック教会とは、教会の役割や、教会に伝わる伝承の尊重の面で親近性があったが、ローマ教皇の権威に対する扱いなどに一致できない点があり、学問的にも範としがたい部分があった。プロテスタント教会については、教会と世俗権力との関係の扱いには親近感があり[11]、教義研究においても習うべきところが多い一方、教会や聖職者の役割や伝承の扱いなど、一部に受け入れがたい部分があった。そのため、両者に学びつつ、折衷的に取り入れるということになったように思われる。

2．正教教育改革（1808-1814 年）の展開

アレクサンドル 1 世の治下において、ロシアは急速に国家としての機構を整える。

その口火を切ったのは、従来のコレギア制にかわる省庁制の導入（1802 年）である。内務省、外務省、法務省、文部省等 8 つの省が中央行政機関として組織され、その長の合議体である大臣委員会が設置された。

翌 1803 年に学制が発布されたことは前に触れた。

その概要をかいつまんで記すならば、普通教育機関として、大学、ギムナジウム、郡学校、教区学校の 4 段階が設定された。大学は、1755 年に設立されていたモスクワ大学の他デルプト、ヴィルノ、ハリコフ、およびカザンに設置された[12]。全国は、それぞれの大学の学区に分割され、各大学は、その担当学区内のギムナジウムの管理も担当することになった。また、各ギムナジウムは、その担当学区内のより下級の学校の管理を担当するという具合に、学校は、教育機関であると同時に、その下位の学校に対しては行政機関としての機能を持つこととされた。

この学制制定は、ロシアにおける教育制度形成の画期をなしたことは疑いない。だが、

---

[10] たとえば、*Смирнов С.* История Московской славяно-греко-латинской академии. М., 1855. С. 139.

[11] ウエストファリア条約（1648 年）によって、領主の信仰がその領土に及ぼされることが確認されたことを想起されたい。また、英国国教会の首長は、統治者たる国王である。

[12] ペテルブルクについては、大学のかわりとして師範学校が設置されたが、その後 1819 年に大学に改組された。

その一方、大学は国費によって設置されたものの、教育の底辺を支える教区学校の設置には国費が向けられず、地元負担で設置・運営しなくてはならないなど、全国に学校教育を普及させるには不十分な点を多く含んでおり、実際に、教区学校の設置はほとんど進まなかった。

ともあれ、こうして全国的な普通教育制度が立ち上げられた直後に提起されたのが、正教教育の改革である。

そのきっかけとなったのは、1805 年に、当時スターラヤ・ルッサの主教で、ノヴゴロド=ペテルブルク主教代理のエヴゲーニー（ボルホヴィチノフ 1767-1837 年）がロシア正教教育改革に関する覚書を作成し、関係者の間に回覧したことである。エヴゲーニーは、この覚書をペテルブルク府主教アムブローシー（1742-1818 年）の依頼により起草したと伝えられる。エヴゲーニーは、モスクワ神学アカデミーに学ぶ傍ら、モスクワ大学に出入りし、歴史や書誌学に親しみ、古典古代に関心を向ける、当時の聖職者としては異色の人物であった[13]。その覚書について、モスクワのロシア歴史古文物協会 Общество истории и древностей российских の影響を指摘する意見もある[14]。

その後、アレクサンドル 1 世の命によって 1807 年に宗教学校改革委員会が組織された。

メンバーは、宗務院のオーベル・プロクロールであったアレクサンドル・ゴリーツィン公、ペテルブルク府主教アムブローシー（ポドベドフ）、カルーガ主教フェオフィラクト（ルサーノフ）、国事尚書[15]ミハイル・スペランスキー、皇帝の担当司祭セルギー、および従軍司祭イオアン・デルジャーヴィンであるが、中でも中心的な仕事をしたのはスペランスキーであり、彼が途中で退任した後それを引き継いで完成させたのはフェオフィラクトとされる。委員会は、翌 1808 年に答申を提出し、その答申に基づいて、正教会の教育制度改革が開始されることになる。

ここに煩をいとわずその答申の概要を記すならば、次の通りである[16]。

・正教の教育機関を管理する上部機関として、宗務院のもとに宗教教育小委員会を設置する。
（世俗の権力および主教区から独立）
・神学アカデミー、神学校、郡学校、教区学校の 4 つの段階を設ける。
・アカデミーは、ペテルブルク、モスクワ、キエフ、カザンの 4 箇所とする[17]。

---

[13] Энциклопедический словарь. Т. 11. Вып. 21. СПб., 1893. С. 411. のちに、1822 年にはキエフ府主教に任じられる。『ロシア正教教会人作家歴史事典 Словарь исторический о бывших в России писателях духовного чина греко-российской церкви』（初版 1818 年, 第 2 版 1827 年）、『プスコフ公国史 История княжества Псковского』（1831 年）などの著作がある。

[14] エヴゲーニーの覚書については、さしあたり、次の文献を参照。*Полетаев Н.* К истории духовно-учебной реформы 1808-1814 г. // Странник. 1889(2) С. 514-541, 1889(3) С. 54-77.

[15] статс-секретарь. ここでは山本俊朗氏の訳語を採用した。

[16] 答申のテキストは ПСЗ. Т. 30. № 23, 122. С. 368-395. ここでは、*Титлинов.* Духовная школа в России в XIX столетии. Т. 1. С. 23- 53. によって紹介する。

[17] ただし、カザン神学アカデミーは、この後 1818 年に一旦閉鎖される。再開されたのは 1842 年である。Энциклопедический словарь. Т. 1. Вып. 1. СПб., 1890. С. 257.

・神学校は、36 の各主教区にひとつづつ設置する。
・郡学校は、ひとつまたはいくつかの郡にひとつ設置する。
・教区学校は、いくつかの教区にひとつ設置する。
・アカデミーは、宗教教育小委員会の直接の監督下に入る。
・アカデミーは神学校を監督する。
・神学校は、その主教区内にある下位の学校を監督する。
・教区学校は、2 年の課程とし、ロシア語の読み書き、文法、算術、教会音楽の歌唱、簡単な教理を教える。
・郡学校では、4 年間の課程で、ロシア語文法、算術、および歌唱を継続するほか、ギリシャ語・ラテン語の初歩、歴史、地理、教会史、教理問答および教会のしきたりを教える。
・神学校は 4 年間の課程で、以下の科目を教える。
文学（雄弁術。ギリシャ語、ラテン語、ロシア語の作文と講読。文献学と美学）。世界史、世界地理、ロシア史、ロシア地理、聖書の歴史と地理、学問史 История ученая。数学（代数学、幾何学、応用数学、力学初歩、測地学、パスハの暦学）。哲学（論理学、形而上学、理論および実験物理学、道徳）。神学（教理学、道徳神学、解釈学、教会考古学）。語学（ヘブライ語、ドイツ語、フランス語からひとつ選択）。
・アカデミーは、同じく 4 年の課程で、教科は神学校と基本的に共通。
・教区学校と郡学校の教員は、神学校から資格証明を得ることが必要。
・郡学校の校長は博士号ないし修士号の取得者であることを要する。
・神学校の校長は博士号の取得者であることを要する。
・6 歳に達した教会関係者の子女は、教区学校の管轄下に入る。神学校入学までは、自宅学習してもよいが、毎年学校で試験を受け、成績がよくない場合は、通学しなくてはならない。
・教区学校では 1 年、郡学校では 2 年の留年ができる。
・それぞれの学校で成績が十分である者が、上級学校に進学できる。

語学について付け加えるならば、これまでラテン語中心で行われてきた教育において、ギリシャ語にこれと対等の地位を与えようということに答申の主旨がある。

この他、答申には、学位についての規定、その他組織管理上の規定などが含まれる。

また、財源面では、学校のタイプごとに、そこに配置すべき教員の定員とその俸給を定め、教員の大幅な増員とその俸給の増額を求めた。全体としての必要額を年に 600 万ルーブリと見積もり、国費の他、基金を積み立ててその収益を充てること、さらに教会で使用する蝋燭の販売収入を充てることを提案している。

これより前、パーヴェル 1 世時代の 1797 年に教会学校予算は大幅に増額されていたが、この段階でも年 18 万ルーブリだったことを考えると、これはきわめて大幅な増額と言えよう[18]。

[18] *Титлинов.* Духовная школа в России в XIX столетии. Т. 1. С. 14.

以上の答申は、そのまま即座に実施されたわけではなく、各学校において漸次的に実施しながら、1814 年の学則制定に至るまで修正を加えつつ行われたわけだが[19]、これをきっかけとして、ロシア正教会の教育体制は大幅に拡充され、飛躍的に充実したと言える。

なお、Б. チトリノフによると、改革直前（1808 年）の正教教育機関としては、4 つのアカデミー、35 の神学校、76 のより下位の施設があり、それぞれ、3,889 人、20,018 人、4,619 人の学生がいたとのことである。合計すると、29,000 人弱ということになる[20]。

この学生数は、改革の開始当初、大きく減少したらしい。チトリノフによると、不適合な大量の学生が除籍されたためとのことである。

その後の学校と学生の数であるが、イーゴリ・スモリッチによると、1850 年には 4 のアカデミー、47 の神学校、182 の下位の学校に、それぞれ 383 人、16,702 人、24,737 人が学んでいたという[21]。アカデミーが少数精鋭教育となる一方、裾野が拡げられたことがうかがわれる。

この答申には、まだプラトンの名を見いだすことはできない。ただし、ラテン語だけでなく、ギリシャ語にも相応の時間を割くように配慮されている。

答申の後、宗教教育改善委員会は、同じメンバーのまま、宗教教育小委員会に改称され、引き続いて宗教学校学則の制定に当たることになる。この作業が完成したのは 1814 年のことであった[22]。

プラトンの名が挙げられるのは、この 1814 年に制定された宗教学校学則のうち、アカデミーの哲学科目について規定した部分である。以下に、学則のその部分を紹介する。

Ⅲ　哲学クラス

158条 哲学的諸学は、歴史諸学と同様、2つの別個の取り扱い方により教授される。第1点は、学生たちに、哲学において用いられるさまざまな表現や用語を理解させることである。これは、哲学用語学と呼ぶことができ、哲学学習の最初のステップである。このステップは、本来的に神学校の範囲である。哲学的諸学を教授する際の第2点は、それぞれの対象について優れた哲学者たちの見解を叙述し、相互に比較し、何か共通の原理にそれを解決したり導いたりすることで、学生たちに、真の哲学の精神を理解させ、彼ら自身を哲学研究に慣らし、このような探求の最良の方法に親しませることである。この教授法は、本来的に、アカデミーの範囲である。

159条 従って、哲学の教授は、学生たちの記憶を呼び覚ますために、哲学用語を簡単に

---

[19] 実際、学習負担過剰との声が多く寄せられたそうである。また、教員の確保も、少なくとも初期においては相当困難だったと思われる。

[20] *Титлинов.* Духовная школа в России в XIX столетии. Т. 1. С. 5-6. なお、この統計にはタンボフ神学校が漏れているとのことで、実数はもう少し増える筈である。

[21] *Смолич И.К.* История русской церкви, 1700-1917. Ч. 1. М.: Изд-во Спасо-Преображенского Валаамского монастыря, 1996. С. 667.

[22] ПСЗ. Т. 32. № 25, 673-25, 676. С. 910-1002.

おさらいしつつ、その後、彼らを哲学的見解の源泉そのものに導き、その初歩的基礎および、さまざまな理論の相互の関係を示さなくてはならない。

160条 人間の見解が多様であるなかにおいて、教授が守らなくてはならない筋道がある。その筋道とは、福音の真理である。教授は、自分自身も学生たちも、最高の哲学の光を、それをキリスト教の教えに求めないならば、決して見ないであろうということ、その理論だけが、根拠のある公正なものであって、いわゆる福音の真理に根ざしていることを、心底から確信していなくてはならない。なぜなら、真理はひとつであり、謬見は無数にあるからである。

161条 古代の哲学の中では、プラトンが真の哲学の最重要の柱である。彼の著作や、彼の追随者の優れた著作の中に、教授は、基本的な哲学の学説を求めなくてはならない。しかしながら、この際、決してその学説を、断片的なものや、彼のさまざまな意見を集めた短い抜き書きの中に見いだしてはならない。そこでは、解説者の無知により、奇妙なやり方で、全てが歪められているのである。彼の真の体系は、勤勉で長期間の苦しい勉学によって、彼の本当の著作中に求めなくてはならない。近代の哲学者の中では、彼に近い意見を持つ者が優先的に扱われるべきである。

162条 [以下略][23]

この部分からは、次のことを読み取ることができるように思われる。

まず第 1 に、哲学者の著作原典の研究が必須とされていることである。特にプラトンの名が挙げられていることから、自動的にギリシャ語に親しむことが必須条件ということになる。

第 2 に、哲学とキリスト教の教義との調和が必須とされていることである。ロシア正教の教育機関として当然と言うべきかも知れないが、哲学研究の結果、キリスト教、あるいはロシア正教の教義とされていることと噛み合わない結論に至ることもあり得ると思われるが、それは許されないことになっている。予定調和的で、楽観的な見方をしているとも言える[24]。

しかし、たとえばプラトン哲学を取ってみても、哲学とキリスト教神学は必ずしも一致するものではない。プラトンにおける神の観念について考えてみれば、それは直ちに諒解されよう。そういう難問を残した規定でもある。

第 3 に、神秘主義のにおいがすることである。160 条にある「最高の哲学の光 свет вышней философии」という句は、宗教を宇宙感覚に基づくものとするシュライエルマッハーの『宗教論』やフリーメーソンの秘儀を連想させる。起草者は、キリスト教と、ヨーロッパから輸入されて当時ロシアで流行した神秘主義の調和をここで語ろうとしたように思える。

---

[23] ПСЗ. Т. 32. № 25, 673. С. 925-926.

[24] あるいは、杉浦秀一の表現を借りるならば、これを「オカルト的」と称することもできよう。杉浦秀一「ウラジーミル・ソロヴィヨフとオカルティズム」『スラヴ研究』No. 52、2005 年。

V. 神学

166 条 神学学習の最良の方法は、疑いなく、聖書を読み、原典および教父たちの優れた解説により、その真の意味を確かめることである。

167 条 それゆえ、教義学に次いで解釈学が重要とされるべきである。

168 条 論争に属する部分は、学生たちに知らせることは必要であるものの、あまりにそれにこだわることは有益ではない。論争で触れられる主要な問題についての概念と、そのよい解決法を、神の言葉は討論や人智の中にあるものではないことを常に想起させつつ与えれば、それで十分である。

169 条 神学の道徳的な部分は、それとは逆に、強調されなくてはならない。

170 条 神学の学習においては、他のあらゆるものと同様、学生たちは、彼らに与えられた素材に基づき、論説や考察を記すことを演習しなくてはならない。

171 条 わが教会の教会法は、教授に特別の注意を要求する。なぜなら、これまで、教会法にはしかるべき秩序が与えられておらず、探求によってその本来を解き明かすべきだからである。

172 条 その上、このクラスにおいては、説教を作文することが不断に行われなくてはならない。十分な水準のものは集会において朗読され、優れたものは、アカデミー付属教会もしくはその他の場所で、主教区の長の命において、朗読される。聖職者である教師たちは、このことにおいて学生たちには生きた模範となり、学校には、キリスト教社会からの好評を得、社会に利益と教訓をもたらすよう努める。

神学アカデミーの課程の規定としてはやや意外なことに、この章は、哲学の章に比べて短く、内容も単純である。

ここでは、正教をとりだして論じる箇所がなく、他宗派と正教との関係にも一切触れていない。むしろ、論争に係わることを戒める口ぶりである。キリスト教は、（少なくとも）教義としては単一であるべき、というエキュメニズム的態度が背後に感じられる。

ひとつ注目してよさそうなことは、ここで演習の必要が謳われていることであり、ドイツの大学の影響が感じられる[25]。また、信仰の源として、聖書と教会に伝わる伝承のどちらに比重をかけるかというと、聖書にかかる比重が大きく、伝承について言及がない[26]。これ

---

[25] 潮木守一『世界の大学危機：新しい大学像を求めて（中公新書 1764）』中央公論新社、2004 年、54-62 頁。
同書によれば、ゼミナールを最初に導入したのはベルリン大学の「古典学」科目で、1812 年のことという。

[26] 当時、モスクワ神学アカデミーの学長で、この学則制定に大きく関与したとされるフィラレート（ドロズドフ）は、このような立場を取っていたことが知られる。これが、19 世紀後半にマカーリーが編んだ教科書 *Макарий, архиепископ Литовский и Виленский.* Введение в православное богословие. 4-е изд. СПб., 1871. においては、「正教神学の源泉は聖書および聖なる伝承の 2 つである」と謳われる。(C. 251)

は、プロテスタントに近い立場であり、ここにもドイツのプロテスタント系神学、もしくは英国外国聖書協会の影響が感じられる[27]。

以上、19 世紀初頭のロシア正教宗教教育改革において、プラトンが重要な哲学者として取り上げられたことを述べたが、どうしてここにプラトンが取り上げられたのか、ということが問題である。

いつ、誰の、どのような主張がこの下敷きにあったのか解明が求められるが、残念ながら、筆者はいまだこの問題に答える史料を見いだすに至っていない。

そこで、今回はとりあえず、当時のロシアをめぐる思想的状況の文脈において、この問題を考えてみることとしたい。

ここで注目したいのは、①近代キリスト教思想とロシア　②古典古代研究とロシア　という二つの位相である。

3．近代宗教思想の流入

ピョートル改革を経た 18 世紀のロシアは、西欧との交流が深まり、特にエカテリナ 2 世の治世（1762-1796 年）以後、西欧の思想の流入は顕著となった。

キリスト教に関するものも、この例外ではなかった。

ところで、17 世紀から 18 世紀にかけて、西欧においては、キリスト教がその自明性を失い、制度と文化の脱キリスト教化が進行する一方、教会の外にある知識人たちの間で、キリスト教をどのようにとらえるべきかが盛んに論じられるようになった。

深沢英隆によれば、キリスト教をめぐる新しい状況への対応は、おおまかに言って、次のような種類に分けられるという[28]。

(ア) 理性宗教論（理神論）　宗教をすべての人間に共通する自然的本性 ＝ 理性に結びつけようとする立場。
(イ) 宗教批判論　宗教の否定的本質を語り、終極的には宗教の止揚や撤廃を予測ないし要請する立場。
(ウ) 神秘主義　非合理的な神性やその直接体験に宗教の精髄を見る立場。
(エ) 宗教の歴史論　宗教を発展史的にとらえる立場。

これらの言説は、いずれも 18 世紀以後のロシアにもたらされ、ロシア正教の立場にも影響を及ぼした。ただし、ロシアにおいては、制度と文化の脱キリスト教化を進めるよりも、

[27] British & Foreign Bible Society. 宗派の枠を超えて世界的に聖書を普及させることを目的に、1804 年に設立された。そのため、世界の諸言語への聖書の翻訳を推進し、宗派を超えて利用できるように、注釈抜きの聖書を大量に出版した。1812 年に設立されたロシア聖書協会は、その支部のひとつである。これについては、拙稿「ロシア聖書協会と聖書ロシア語訳事業」『スラヴ研究』50 号、2003 年 および、山本俊朗『アレクサンドル一世時代史の研究』早稲田大学出版部、1987 年、第 1 部第 7 章「聖書協会」を参照。
[28] 深沢英隆『啓蒙と霊性：近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、2006 年、9-25 頁。

むしろ、ロシア正教を国家が取り込んでその制度化を進める[29]一方、キリスト教的文明国として自らを位置づけるための努力を払うようになったという点[30]、および言論の自由が乏しい状況において、宗教批判が国家批判に結びつくような論は出しにくいという点、さらに、フランスにおける激しい宗教批判は、フランス革命とナポレオン戦争を招いた一因と考えられ、否定的に見られたことから、(イ) 宗教批判論の立場は取り難かったように思われる。

残るのは、(ア) 理性宗教論（理神論）、(ウ) 神秘主義、(エ) 宗教の歴史論であるが、これらは相互に排除しあうものでなく、共存しあうものと考えられる[31]。

すなわち、(ア)からは、伝承をそのまま継承するだけでなく、普遍的な人間性を前提として、理性の目で宗教の根底を探求し、合理的に基礎づけようという態度が生まれ、(ウ)からは、理性の目では測りがたい神の存在を、普遍的な人間性を媒介に超越者として措定しようという態度が導かれ[32]、(エ)からは、宗教を歴史的・文化的現象として、学問的に把握しようとする態度が帰結されるであろう。

18 世紀末から 19 世紀初頭のロシアにおいては、これら 3 つの潮流の全てが見られたが、そのうち、特に神秘主義の傾向は、1810 年代に、上層階級において大きな興隆を見せた。しかし、これは同時に、伝統的な宗教の枠組みを破壊し、教会離れを促すものとして、正教会の一部の聖職者に大きな不安を抱かせた。また、正教会の側には、キリスト教各宗派を平等に扱おうとするエキュメニズム的方向への反発もあったであろう。結局、1824 年に形勢は大きく転じた。神秘主義的思潮の一翼を担うものと目されたロシア聖書協会は活動を停止させられ、行政上、諸宗派を平等に扱うべく 1817 年に組織された宗教・教育省は解体され、神秘主義的な活動は、弾圧を被ったのである[33]。

しかし、これは、神秘主義的要素がロシアから根絶やしにされたということではあるまい。一部の目立った人物が追放されたり、組織が解散させられたりしても、多くの関係者はそのままだったのであり、教会の中はともかく、知識人の間においては、この要素は長く影響を与えたに違いない。

そして、プラトン哲学が登場する所以であるが、理神論が結局神の存在を証明できず、また、神の存在を直接体験するという神秘主義的傾向には危険が大きいということになる

---

[29] 総主教制が廃止され、皇帝の任ずる聖職者の合議体である宗務院が正教会をコントロールするようになったこと（1721 年）、修道院財産の国有化（1762 年）により、教会運営財源は国費でまかなわれるようになったことが挙げられる。

[30] 例を挙げるならば、パーヴェル 1 世（在位 1796-1801 年）のマルタ騎士団総長への選出（1801 年）や、アレクサンドル 1 世による神聖同盟の提唱・結成（1815 年）は、この文脈で理解されよう。

[31] たとえば、フリーメーソンは、(ア)と(ウ)の両方の傾向を備えた団体のように思われる。

[32] カントの哲学においては、神の存在は、論理的に証明不可能なものとされた。竹田清嗣『プラトン入門（ちくま新書 190）』筑摩書房、1999 年、46-48 頁。ということは、神は直感によってのみとらえられる、もしくは全く認識不能ということになるだろう。

[33] 当時の国際政治の状況において、特に、対オスマン関係において、カトリック系のフランスやオーストリアをはじめとする諸国の協力を得る必要から、政策転換を説明する意見もある。*Кондаков Ю.Е.* Государство и православная церковь в России: эволюция отношений в первой половине XIX века. С. 246.

と、ギリシャ哲学の根本に戻って、キリスト教の教義がどのように発展したかを哲学史的にたどってみるということになるように思われる。そして、ここで先ず以て取り上げられるべき存在は、キリスト教の教義形成に大きな役割を演じた教父たち、およびその教父たちの仕事に哲学的基盤を用意したプラトンということになったのではあるまいか[34]。

4. ロシアにおける古典古代研究

ルネサンスにおける古典の復興を経ていた 18 世紀の西欧において、ギリシャとローマの古典時代には、文明の規範というイメージが付与されていた。

ロシアは、西欧におけるルネサンスを歴史的経験として持たなかったが、西欧文明を摂取し、ヨーロッパの一員としての地位を確保する上では、ギリシャ・ローマの古典時代を継承する文明的存在であることを示すことが必要、もしくは有効と考えられた。

ロシア正教会を統括する宗務院の図書館、および、キリスト教関係テキストの出版を担当する印刷庁の図書館には、18 世紀までに多くのギリシャ語写本が収集・蓄積されていたが、内容が知られていなかったため、西欧で進んでいた古典の文献学的研究、あるいは聖書の本文批判研究の外に置かれていた[35]。実は、これらのギリシャ語写本に関しては、ピョートル 1 世の命によってアタナシー・スキアダが編んだ目録がすでに 1723 年に刊行されていたが、ほとんど配布されず、注意を惹かなかったのである[36]。

ライプツィヒ大学神学部教授ヨハン・アウグスト・エルネスチ（1707-1781 年）は、ロシア政府からモスクワ・ギムナジウムの教師の推薦を依頼され、弟子のクリスチアン・フルードリヒ・マッテイ（1744-1811 年）をここに送った。1772 年のことである。4 年後の 1776 年に、マッテイは、モスクワ大学に転出し、1778 年にはその正教授に昇進するが、その間、1773 年には、エカテリナ 2 世が司祭サムイル（ミスラフスキー、1731-1796 年。この後 1783 年よりキエフ府主教）に委託した、宗務院図書館と印刷庁図書館のギリシャ語写本の目録作成に参加していた。

こうして新たに作成された目録は、ようやく 1805 年に完成するが、これによって、ロシアは古典古代から伝わる多くの重要な写本を所蔵することが明らかにされ、古典古代研究におけるロシアの地位は格段に高まった。オランダの古典学者マウリス・ヴェスは、「これはまさに、ポチョムキン、エカテリナ大帝、およびアレクサンドル 1 世が心から望んだことだった」と述べるが、まさにその通りであろう[37]。

オックスフォード大学においては、1788 年以来、ロバート・ホームズ（1748-1805 年）が

---

[34] 19 世紀のロシア正教神学において、主たる対抗の対象はカント哲学だったという指摘もある。たとえば、Frances Nethercott, *Russia's Plato: Plato and the Platonic Tradition in Russian Education, Science and Theology (1830-1930)* (Aldershot, Burlington, Singapore, Sydney: Ashgate Publishing, 2000), pp. 78-79.

[35] このコレクションがどのようにして形成されたかは、それ自体非常に興味深い問題であるが、本稿ではそれに触れることはできない。

[36] Marius A. Wes, *Classics in Russia 1700-1855: Between Two Bronze Horseman*, Brill's Studies in Intellectual History, v. 33 (Leiden: Brill, 1992), pp. 72-73.

[37] Wes, *Classics in Russia 1700-1855*, p. 77.

七十人訳聖書を、現存するあらゆる写本を検討した上で編集・刊行する作業を行っていた。1827 年に完成したこの旧約聖書は、ホームズ=パーソンズ版として知られるが[38]、マッテイはここにモスクワの写本のデータを多数提供した。

さらにマッテイは、モスクワにある新約聖書の諸写本を研究し、Novum Testamentum Graecum と題して、新しい新約聖書テキストを出版する。その初版は 1782-1788 年に、第 2 版は 1803-1804 年に出版されたが、この新約聖書本文研究の基本資料の刊行という業績に対して、皇帝アレクサンドル 1 世は、ダイヤモンドの指輪を贈って、その功績を称えたのである[39]。

ロシア文部省の草創期に、文部次官兼モスクワ大学視学官として活躍したミハイル・ムラヴィヨフ（1757-1807 年）についてもここで触れておきたい。彼は、ロシア歴史古文物協会の創立者でもあり、1784 年に体調不良で帰国していたマッテイをモスクワに呼び戻した[40]他、ゲッチンゲン大学から、古典学者ヨハン・ゴットリープ・ブーレ（1763-1821 年）などの学者を招聘して、ロシアに古代学を根付かせることに努めたのだった。

この後、こうしてドイツから招聘された教師たちの弟子が育つことで、ロシアの古典古代研究は離陸した。また、1828 年には、ウヴァーロフの指導下でギムナジウム課程の改革が行われ、ここでもギリシャ語とラテン語の授業が課されることになった[41]。こうしてロシアは、西欧諸国と肩を並べる古代文明とキリスト教の継承者としての地位を示すことに努めたのである[42]。

終わりに

ゲオルギー・フロロフスキイの『ロシア神学の道』（1937 年）[43]は、ロシア正教史を教義と思想の面から語る時に落とすことのできない名著であるが、その枠組みをなすのが、近世以後のロシアと西欧の接触および、その相互関係の展開である。

そもそも、教父の時代についてはともかく、今後のキリスト教には、教義の発展などな

---

[38] この仕事については、『七十人訳ギリシャ語聖書 V 申命記』河出書房新社、2003 年、巻末に収められた、訳者秦剛平による解説を参照（200-203 頁）。

[39] Wes, *Classics in Russia 1700-1855*, pp. 77-78.

[40] Wes, *Classics in Russia 1700-1855*, p. 82.

[41] Cynthia H. Whittaker, *The Origins of Modern Russian Education: An Intellectual Biography of Count Sergei Uvarov, 1786-1855* (DeKalb, Ill.: Northern Illinois University Press, 1984), p. 145; Wes, *Classics in Russia 1700-1855*, p. 117.

[42] 後年、ドイツの聖書学者コンスタンチン・ティッシェンドルフ（1815-1874 年）が 1844 年に聖カタリナ修道院においてシナイ写本を発見した時、これをロシア皇帝に献上したことにも、上述のような、ドイツ古典学とロシアとの近しさが作用したであろうか。また、一旦挫折したとは言え、ロシア正教会にある程度エキュメニカルな要素が残ったようにも考えられる。これについては、秦剛平『乗っ取られた聖書（学術選書 20）』京都大学出版会、2006 年、234-246 頁 および志田恭子『ベッサラビア統治から見た帝政ロシアの膨張と統合：1812-1917 年』（北海道大学博士論文、2005 年度）132-135 頁 を参照。

[43] *Флоровский Георгий (протоиерей)*. Пути русского богословия. Париж, 1937. この論文では、ヴィリニュスで 1991 年に刊行されたそのリプリント版を利用する。

いのだ、という立場もあり得ただろう。

キリスト教が時代と民族を超えた普遍性を有するものであるならば、そこには、進化・発展は必要とされるものではあるまい。真理は既に啓示され、これをになって人類を救済に導くべき教会がすでにそこに在るのである。

しかし、歴史的条件、とりわけ、西欧における印刷術の発明、人文主義および宗教改革は、ロシア正教会がここにとどまることを許さなかった。

すなわち、写本の時代の、部分的で不完全なテキストに過去の完成の姿をしのぶ態度から、網羅的に写本を調査し、それを系統的に研究し、その情報を世界的に共有することが可能となり、推進されるようになったのである。

キリスト教は信仰として内面化される一方、その学的根拠を示すことが求められるようになった。

このことは、キリスト教会の普遍的妥当性を掘り崩して、対立と危機を生じさせた。

そして、ロシア正教会においても、西欧の神学や文献学研究をふまえて、信仰のよるべを明らかにすることが必要とされるに至ったのである。

アレクサンドル 1 世期には、教会の普遍性が指向されていたことを本論では述べた。

しかし、この方向性はほどなく挫折し、修正を余儀なくされたように思われる。

国内的には、神秘主義思想の流行が、社会の一部に危機感を抱かせ、治世末期の 1824 年にはついに宗教政策の大転換に至った。

国際的には、キリスト教国間の協調機構として、神聖同盟を結成したものの、さしたる成果を挙げることはできなかった[44]。

ここには、前述した、ロシアと西欧諸国における、制度と文化の脱キリスト教化の程度の差が、影を落としたように思われる。アレクサンドル 1 世は、フランス革命とナポレオン戦争後の国際政治を、キリスト教原理をもとに再建したいと考えた。しかし、キリスト教原理は、ヨーロッパの国際政治の文脈において、すでに、協調体制の担保としての有効性をほとんど失っていたのである。

この後、1830 年にポーランドで十一月蜂起が起こるが、これも、ロシア帝国の一体性を揺るがし、キリスト教の普遍性を指向することで統一をはかろうとする路線の失敗と受け止められたことであろう。

セルゲイ・ウヴァーロフ（1786-1855 年）が、ニコライ 1 世期の有名な定式「正教、専制、ナロードノスチ」をはじめて唱えたのは、この少しあと、1832 年にモスクワ大学とギムナジウムを視察した時のことである。

その報告書で、ウヴァーロフは次のように述べる。

［…］しかしながら、わたしは、われわれがこの誤った手段を繰り返さず、信頼性があ

[44] 神聖同盟については、最近では次の本があつかっている。池本今日子『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策：ヨーロッパ構想と憲法』風行社、2006 年、第 1 部第 2 章「神聖同盟条約」。

り控えめな教訓、および厳格かつ鋭敏な監督によって、徐々に若者の心を惹きつけていくこと、および、当代の難問のひとつの解決と合流しなくてはならないという観点から、それをほとんど感知されずに遂行することを、つよく期待している。その難問とは、正教、専制、ナロードノスチという、我々の救済の最後の錨であり、われらが祖国の力と偉大さの最も信頼できる保証となっている、真のロシア的キリスト教原理に対する深い確信と暖かい信仰を伴った、正しい、基礎をもった、われらの時代に必要不可欠な教育である。[45]

この時までに、ロシアと西欧におけるキリスト教の位置の差は、かなり自覚されるようになっていた。西欧文明を受容し、さらにそれに参画することは引き続き必要とされる一方で、キリスト教に関しては、ロシアの側が西欧より正しい伝統を伝えており、優位の面があるという意識が次第に共有されるようになった。

ウヴァーロフを扱ったモノグラフにおいて、シンシア・ウィッタッカーは次のように述べる。

このように、西欧のキリスト教の伝統は分裂し、歴史的役割としてそれが鼓舞すべき国民と文明は、紛争と混乱に呑み込まれているように思われる。それとは対照的に、信奉者たちは、正教はロシア国民を「記憶なき」太古からいまだに保持しつづけており、それが、個人、社会およびツァーリにとっての行動と信仰の基準を与える、利害共同体における「内的統一の原理を据える」ものと主張することができる。歴史的に、正教は、ラテン西方、異教的東方およびイスラム的南方の強襲に堪えてその純粋さを保持し、同時に、現存権力に平和と協力を勧め、教会と国家の西欧的な二元的状態をとることは稀だった。それゆえ、もしウヴァーロフの図式のように、キリスト教的道徳と政治構造が手を携えて進むならば、正教の諸原理は、西欧のどんな宗派よりも、神の摂理によるその役割に忠実でありつづけ、国民発展のためのよりよい基礎を提供することだろう。[46]

本稿で取り上げた正教会の教育改革は、結果としてこういう転換の基盤を用意したように思われる。

この改革によって、4 つの神学アカデミーによる、古代テキストの原典に立脚した、哲学・神学研究・教育体制が組織された。これによって、ロシアの教会伝統がキリスト教の伝統とどのような関係にあるか、あるいは古典古代文明とロシアとはどのような関係にあるかが、学問的に明らかにされるようになった。

また、この改革を契機として、哲学・神学教育は次第にラテン語中心を脱却し、ロシア語を中心とするものに移行していった。17 世期および 18 世紀のロシアの神学者たちは、主

[45] Сборник постановлений по Министерству народного просвещения. 2-е изд. Т. 2. отд. 1. СПб., 1875. С. 511-512.
[46] Whittaker, *The Origins of Modern Russian Education*, p. 96.

にラテン語で著作したが、19 世紀以後は、ロシア語で著作することが普通になる。また、授業も、徐々にラテン語からロシア語に移行したという。これは、1814 年の学則で規定されていることではなく、特に 1824 年の路線転換後は、ラテン語重視への揺り戻しも見られたが、結局は、自然にその条件ができたということであろう[47]。

しかし、このことは、結果として、ロシア正教神学が、西欧と距離を取って展開することを助けたものと思われる。

『ロシア神学の道』の英訳は 1979 年に出たが、その訳者は、序文の冒頭で以下のように述べる。

> 今から 160 年以上前の 1814 年、当時は若き正教改革者であり、後に「普遍的な（エキュメニカル）」モスクワ府主教となる掌院フィラレート（ドロズドフ）は、ロシア教会学校のための学則を書き上げ、皇帝アレクサンドル 1 世に提出した。近代ロシア正教思想の目覚めは、この瞬間にさかのぼる。フィラレートが語ったように、正教が西欧の一連の宗教的・文化的熱狂に眩惑されて、道をはずし、そして今や「使徒的教会のほんとうの精神をもった顔を見せ」なくてはならない時に、学殖のある聖職者と俗人が結集したのだった[48]。

19 世紀のロシア正教神学は、こうして、西欧との接触を通じて自らの位置を「再発見」することを通じて展開したと言えよう。

---

[47] *Флоровский.* Пути русского богословия. С. 173-176.

[48] Robert L. Nichols, “Translator’s note” in Georges Florovsky, *Ways of Russian Theology*, Collected Works of Georges Frolovsky, v. 5. Pt. 1. (Bermont, MA: Nordland Publishing Company, 1979), p. xi.